
奇妙な料理屋

ぼーず平野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇妙な料理屋

【Nコード】

N9996P

【作者名】

ぼーず平野

【あらすじ】

級友の下川に連れられて、私が足を運んだ料理屋であった奇妙な出来事とは……。

ある年の夏の日、長らく病に臥せていた下川から連絡があつて、旨い料理屋があるから行ってみようと云う。旨いものには目がないので、暑さを押してでも出かけてみる氣になった。

下川とはある田舎の駅で落ち合った。彼と会うのはほんとうに何年かぶりで、痩せて輪郭が変わっているのと髪が少し薄くなっている、ちよつと別人に見えた。

「もういいのかい」

「うん、だいぶいいのさ」と云いながら、下川は近道でもするのか、細い農道へ入っていく。話し方は以前と変わらないが、痩せているためか少し言葉が不明瞭に聞こえる。

「病み上がりに、この湿氣は毒じゃないか」

「これくらい平氣さ」

「奥さんは」

「おかげさまで。そうそう、これを家内が君にと」

下川はそう云って、細い指で百貨店の包みをつまみあげた。

「なんだい」

「鮎の釘煮だよ」

下川の声は水の中をくぐってきたようで、聞こえにくい。

「そいつは嬉しいな。よくもまあ」

「君の好物を忘れるものか」

その日は、いつもにも増してひどく蒸し暑い午後だった。下川にもらった百貨店の包みをさげたままかんかんした日差しの中を歩いていくと、向こうの大池から湧いたらしい風が田圃を渡るうちに熱風となって私に吹きつける。

「ずいぶん田舎の店なんだね」

「実は僕の従弟が始めた店なのさ」

「そりゃ楽しみだ」

下川とは高校以来の同郷で、何度も家に行ったり来たりした仲だが、彼に従弟がいたというのは初めて聞いた。

「まだ開けたばかりでね、宣伝をしないから客の入りは良くない」
田圃の中を一所懸命歩いてやがて登りにさしかかった頃、小径はいつしか雑木林に包まれて薄暗くなりはじめ、蝸の声に降られる。そこが目的の料理屋である。

大層古びた門構えに屋根の低い平屋で、看板も暖簾も見当たらない。ちよつと見た感じは廃屋のようで、ほんとうにここが料理屋かと思われる。

「ずいぶんと古びてるんだな」

「なに、古いのを買ったのさ。今に改装するんだがね」

「それにたいへん暗いね」

下川について店に入ったが、なかは暗くてどこに何が置いてあるのか判然としない。

「そうかい、僕には良く見えるんだが。ではここに座りたまえ」

彼は意外なほど敏捷に動いて、私を椅子に座らせた。

目が慣れてくると、少しずついろいろなものが見え始めた。十坪ほどな狭い店内の、あちらこちらに雑然と何かが積みあげてある。なんだろうと目を凝らすと、それ以上は見えるようで見えない。テーブルは私と下川が向かい合っているただ一つきりである。

奥に通路があって厨房に通じているらしいが、ほんの二三歩向こうが墨で塗られているかのよう、すんと真っ暗になっていて不思議になにも見えない。

すると音もなく人が現れて、洋燈に火を入れた。

「いらっしやいませ」と云う声が、正面にいる人からではなく、どこから聞こえるのか判らない。

「少しは明るくなったろう。おい、ちゃんと灯りを入れておかなきゃ、駄目じゃないか」

下川は曇った声で、洋燈を点けた店主に向かって小言を云う。

その、相手の顔が、はっきり見えているはずなのに、見ようとす

ればするほどよく見えない。姿かたちの輪郭が判っているようで、肝心のところが判らない。

「ここは決まったものしかできないが、それでいいだろう」と下川が云う。

私は曖昧に返答をしながら、何か理由をつけて逃げ出したい気持ちになった。

「おい、先にビールをくれ」

下川がそう云ってビールを取った。

「こうやって昔よく飲んで議論をしたものだ」

下川は懐かしげに云った。

私たちは学生のころ、毎日のようにお互いの下宿を訪れて、ビールを飲みながら夜通しで語り合ったものだった。何をそんなに白熱したのか、今となっては思い出せない。

「そう云えば、最近北村の顔を見ない」

私はもう一人の親友である北村のことを思い出して云った。

「北村がどうかしたのかい」

「うん、つい先月仕事帰りに一緒に飲んで以来、連絡がつかないのさ」

「どうしたんだろう」

「今度家に行ってみようと思うんだ」

「行ってみたらいいよ」という下川の声と、「行ってみなくていいよ」という下川の声が、不意に重なって聞こえるようだった。

「なぜ北村を気にするんだ」

「なぜって」

「少し連絡がつかないくらい、よくある話だ」

「そうだな。しかし、妙に胸騒ぎがするんだ」

「胸騒ぎ？」

「やつは、僕に君の恢復話をしてくれた直後にいなくなった。一緒に飲んだ次の日、奥さんから電話があったのさ。家に帰って来ないってね」

そう云って私は下川の顔を見た。

「僕が恢復した話……いなくなった……」と云いながら、下川は急速に声を落として、まるで螺旋の切れた玩具のように動かなくなつた。

奥からときどき肉を叩く音が聞こえてきて、やがて旨そうな匂いが漂ってくる。どこか懐かしいような気持ちが落ち着くような、しかしいまだ嗅いだことのない匂いである。

時計が止まって時間が判らなくなった。

しばらく待つと、料理の皿が運ばれてきた。ずいぶん早く日が暮れたと思ったら、窓の格子のあいだから闇が店のなかに差し込むようだ。目に映る料理は外から差し込むその闇で、縞状に暗く落ち込んでいる。たくさんの何かが息を殺している気配を感じる。

ふとしたはずみに、暗いなかで掴み損ねたグラスが床に落ちて、大きな音をたてて割れた。その鋭い音にはつとまって卓のうえを見ると、皿いっぱいに広げられた湿った土から、何百匹の百足や芋虫がうごめき出てくるところであつた。

私は咄嗟に、奥に戻ろうとする店主の尻にフォークを突き立てた。すると店主は大きな声をだして六尺ほどもある鼯（いたち）になつた。

「おい、ここは」と云いかけたら、あつと云うまに店がなくなつて、私は雑木林に囲まれた暗い墓場のなかに座っていた。

私のとなりには、随分前に葬られたと思える骸（むくろ）が膝を抱いている。その隣は近ごろの死人のようだ。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9996p/>

奇妙な料理屋

2011年1月17日23時40分発行